ペリー来航前夜の浦賀

嘉永六（一八五三）年四月二十八日、浦賀奉行の水野筑後守忠徳が長崎奉行に転出した。

後任の浦賀奉行には、同日付けで目付で海防掛であった井戸石見守弘道が着任した。ペリー来航情報があり、今日にでも来航する可能性がある中での奉行交代であった。いや、この時点で幕府は「来航なし」と判断しての人事異動であったのであろうか。

この月の晦日、在地奉行であった戸田伊豆守氏栄は新任の井戸に手紙を認めている。この第一信から、井戸が浦賀奉行を離れる十二月までの八か月間に戸田から井戸への私信が『南浦書信』と題されて東京大学の史料編纂所に架蔵されていた。この史料は「浦賀古文書研究会」の有志メンバーでつくった「浦賀近世史研究会」の手によって翻刻され、未来社から出版され、今やペリー来航を研究するために必要欠かせない史料となった。

戸田からの第一信には、井戸が水野の後任となってくれたことを喜び、「腹蔵なく意見交換をしましょう」とある。また「伝達帳」を差し上げなければならないのですが、これは水野に昨年用立てたまま戻ってきていませんと言っている。

業務内容では、洋式砲術指南の下曽根金三郎が二十五日に浦賀に来ました。下曽根の浦賀着を幕府へ連絡してもらうために前任の水野へ知らせましたが、返事がきません。水野の方で出来ないとなればどうのようにしたらよいやらと、これも突然の交代劇に戸惑った様子が記されている。

また、江戸役所詰の与力・小笠原甫三郎と同心・中田佐太郎は明日浦賀を出立します。交代で浦賀へ帰ってくる同心・河野四郎左衛門に南蛮鉄車台が大方出来ていると聞いているので、いっしょに持ち帰るようにとの指示もしている。

第二信は五月二日付で、井戸から急な移動で家の中がてんやわんやと記されていたのであろう。それに対して私も駿府奉行の時は同様でしたと慰めている。

業務面では、船番所の先（灯明堂寄り）の岬、見魚崎に浦賀湊を守るための台場を建設するプランが先へ進ん

でいないことについて、幕府の言う警備はお固め四家は理解するが、浦賀湊を守るは奉行所の役目。そのための東浦賀の明神崎と西浦賀の見魚崎台場は必要不可欠のもので、この台場を彦根藩が受け持つことになれば、浦賀奉行所の役人たちが砲術の稽古をする必要もなくなり、士気も下がるというのが戸田の考えであった。

船での守りは、蒼隼丸が焼失したが大矢弥市という奇特な商人のお陰で、晨風丸という船を造り、これで現状では事足りていることが報告されている。

この日の手紙には、異国船が来航したら、海陸両方から井戸邸へ知らせを出すので、そちらへ着き次第、即刻海防掛月番へ連絡するように指示している。

これをみると、戸田の頭の中には「ペリー来航」があり、この意識が五月中は非常警備体制を敷いて警戒していたことにつながるのであろう。（了）